

DIGITABLE 第 80 回勉強会レポート

2014 年 11 月 15 日 (土) 会場：森下文化センター AV ホール



テーマ：“DIGITABLE —これからの写真フロー”

- 10：10-10：40 ●基調講演：DIGITABLE の歩みとこれからの写真フロー
高木大輔：DIGITABLE 代表、APA（日本広告写真家協会）会員
- 10：50-11：20 ●インクジェットプリンターによるプリントの階調調査：(EPSON PX -5V)
安藤和：DIGITABLE 正会員
- 11：20-11：50 ●なぜ写真を撮るのか？—写真を見る時の体験を考える—
白澤洋一：DIGITABLE 正会員、博士（工学）
-
- 13：00-14：10 ●リコーイメージング株式会社：前川 泰之 / 原 清文 / 江上 晃央 氏
PENTAX645Z、K-3 を中心とした技術セミナー
- 14：20-15：30 ●株式会社市川ソフトラボラトリー：横山 崇 氏 (SILKYPIX による調整技術セミナー)
「感動を写真に盛り込み完成度を高める RAW 現像のワンポイント」
- 15：40-17：00 ●エプソン販売株式会社：松岡 達也 氏
EPSON プリンターを使用したプリント技術セミナー
-
- 18：00-19：30 ●クロージングパーティ：森下文化センター 3F 第一・二研修室
DIGITABLE 写真技術勉強会 (HOME) <http://www.digitable.info>

第 80 回記念勉強会（※参加企業様のご厚意により勉強会参加費：無料）

デジタブルでは 8 周年の記念行事として、11 月 15 日に森下文化センターで一般公開の記念勉強会を開催した。

午前中には基調講演及び会員代表による発表、午後には PENTAX のリコーイメージング、SILKYPIX の市川ソフトラボラトリー、プリンターでおなじみのエプソン販売の三社のご協力をいただき、公開技術セミナーを開催した。

・基調講演：DIGITABLE の歩みとこれからの写真フロー：高木大輔：DIGITABLE 代表

記念勉強会のオープニングは今回の勉強会の基調講演。DIGITABLE の予告ビデオでもおなじみの高木代表が、“これからの写真フロー”をテーマに、DIGITABLE の 8 年間の歩みとデジタル環境の変化、デジタル写真技術の現状、今後の予測について講演を行った。

2007 年に開始した DIGITABLE 8 年間の内、前半の 4 年間は Photoshop を扱う上での基本や、様々な画像ソフトの比較、紹介が主だったが、2009～10 年度頃からは、画像調整とは違った意味での画像管理ソフトやネットを使った画像管理の紹介、デジタルフォトフレームなどの新しいデジタルデバイスの関心が高まってきた。

iPad の発売は 2010 年であったが、DIGITABLE で取り上げた内容についても、この頃から単に画像の調整や高画質



化を追うのではなく、新しい画像の利用法の関心が急速に高まってきた。特に最近の2～3年では、静止した写真画像のみならず、動画への対応や Youtube や SNS への対応も取り上げられてきた。例会での発表にもデジブックなど、新しいインターネットサービスを積極的に使用している会員もいて、後半の4～5年間では、デジタル写真技術の利用法やプラットフォーム自体が、急速に膨張してきたのがよく分かる。次に現状分析として、現在、我々がデジタル写真に対してどのような関心があり、どのような立場にいるのかを、ここで整理してみよう。

一つには、普遍的な作品作り（ファインアートの作品）だ。デジタルカメラも数千万画素となり、フィルムの画質に追いつき、追い越した今、銀塩印画紙の画質に匹敵する作品作りの条件が確立してきた。社会的と文化の熟成もあり、高品質な作品を発表する場も広がり、じっくりと腰をすえて本格的な作品作りに挑戦していくカテゴリーを形成している。

次に商業目的とした画像処理だが、この点では否応なしに、既に写真は真を写すものでもなくなりつつある。たとえば衣料の撮影などでたくさんある全色を撮影するのではなく、画像処理によって色替えをしていくのは、かなり一般化してきている。CAD やイラストレータから起こした擬似写真？の出来栄も、本物の写真と見紛うばかりのものもあり、近い将来こうした物撮りはかなり置き換えられるのではないかと。商品のデザイン自体が、CAD やイラストレータで行われることが当たり前になった以上、時間の問題であるかもしれない。

次に、写真と動画の違いがなくなる？という問題だ。既に、カメラのデジタル化によって、静止画と動画の垣根が取り払われてきている。以前のようにムービーを撮影するのに、専用のビデオカメラを用意する理由は希薄になっている。また撮影後の処理、編集においても、カメラメーカーソフトの殆どで基本的なビデオ編集も可能で、あの hotoshop でさえも動画の編集に高度に対応しているのだ。

静止画か動画か？の選択の意思決定は、ユーザーが撮影後どのように画像を見せたいか？にあり、この点でも昔のように、わざわざ専用の映写機が必要なことはなく、ありふれたテレビシステム、パソコンはもちろんとして、iPad や日常携帯しているスマホで充分なのだ。

動画の共有（＝人に見せる、拡散する）にかんしても、Facebook や Line、またオンライン動画の普及によりインターネットと TV の境界線が無くなるであろう。

新しいトレンドに向けカメラも進化していく。

デジタルカメラの開発から 21 年、長らくそれまでの「コンパクトカメラ＋一眼レフ」の携帯を踏襲してきたカメラ本体にも、ここへきて新しいトレンドに向けた変化が急速に台頭してきている。最後にそれらのいくつかについて触れておこう。

(3D カメラ、アクションカメラ、レンズスタイルカメラ、360 度カメラ…について解説)

最後に DIGITABLE8 年間の歴史の中でも、デジタルメディアの変遷が、年を負うごとに加速度を増し進化していくのがよく分かる。果たして我々の目的はどこへ行くのか？ 答えは見えないが、いつの時代にも我々はデジタル潮流の中で自分を見失うことなく、それらを理解し、判断し自分に取り入れる見識と自由な心を持ち続けたいと念願している。

・インクジェットプリンターによるプリントの階調調査：安藤和：DIGITABLE 正会員

安藤会員はこれまでも、Sillkypix などでの色調に関する研究やプリンターの再現性についての報告を数多く発表されてきた。今回は EPSON PX-5V を使用して、独自に作成されたグレーチャートや、シャドウ、ハイライト部の視覚識別用チャートの再現性についての考察。

なぜこれらのチャートで再現性が分かるのかについて解説で、プリントでの作品作りには、デジタルプリントで再現できる階調域が重要なことがことが認識された。

今回の報告では、明度 5% 以下の暗部では、プリント方法、用紙の種類にかかわらず、黒つぶれに見えてしまうこと、逆にハイライト部では 95% 以上の領域でも、明度 1～2% の差があれば認識できるとのことであった。

このことは階調豊かな作品作りには、特にシャドウ部のコントロールが重要なことを示唆している。

(※午後の市川ソフトラボラトリー：横山氏の SILLKYPIX セミナーでも、一味違う作品作りには「黒の再現が重要」と仰っていましたが印象的であった)





・なぜ写真を撮るのか？—写真を見る時の体験を考える— 白澤洋一: DIGITABLE 正会員、博士 (工学)

写真を見る場面は多様になってきていて、写真展のようにあらかじめ鑑賞を目的として写真と向き合う場面がある一方、パソコンやスマートフォンで Web で情報を得るために写真を見る場面が増えてきている。

今回は、その Web サイトを介して写真を見る経験についての考察だった。

ユーザーエクスペリエンスは白澤さんの研究テーマの一つで、「ユーザー体験」と言っていじらう。

Web サイト上では「写真を見る人 = Web サイトをブラウズする人」としてそのためのデザインと写真技術が大切になる、との考察であった。

また特に Web サイトではユーザーは必ずしも写真を見ることを目的ではない。ユーザーの目的は「See」、「Look」、「Watch」のどれか？という認識が必要だ。情報を得るためや、現地や現物を見るための代替え体験としてが多いとの認識をはっきりさせよう…。

既に Web を介しての写真発表を行って行っている我々に、今後ますます重要になってくるテーマだと思われた。



協力企業セミナー

・リコーイメージング株式会社：前川 泰之 / 原 清文 / 江上 晃央氏

PENTAX645Z、K-3 を中心とした技術セミナー

午後は協力企業三社による、最新の技術セミナー。

はじめはリコーイメージング(株)による注目の新機種、PENTAX645Z、K-3 の紹介と技術セミナー。

5140 万画素の高画質と、それを感じさせないレスポンスで話題の PENTAX645Z。APS-C の一眼レフの成熟を示す名機と評判の K-3。その魅力を余すことなくお伝えいただいた。

特に 645Z、K-3 をはじめとする多くの実機を展示いただき、参加者にとっては実機に触れながら PENTAX の魅力に触れるまたとない機会となった。また 645Z による実際のプリント検証も参加者の関心が高く、暑い熱気の中に三名の講師陣との技術談義の花が咲いた。アドリブで高木代表が 360 度カメラ、RICOH THETA の新型モデルをお借りしてデモンストレーション撮影を行い、展開画像を映写、解説いただく一幕もあった。





「感動を写真に盛り込み完成度を高める RAW 現像のワンポイント」

DIGITABLE の会員にも愛用者の多い SILKYPIX は、使いやすさと美しい仕上がりには定評がある。SILKYPIX の解説ではおなじみの横山氏による最新テクニックの解説に期待がかった。

SILKYPIX Developer Studio Pro6 に搭載された新機能をでは、パフォーマンスの向上、画像処理エンジンやアプリケーション設計を改良し、現像処理はもちろん、調整時の応答性やアプリケーションの起動など様々な部分で速度が向上している。調整機能では、新開発のノイズリダクションによる画質向上が図られるとともに、覆い焼き/HDR ハイライトシャドーの分離調整が可能になり、調整の可能性が大きく広がった。赤目補正、美肌処理もたいへん便利な機能で、ノイズ付加やシェーディング中心補正は作品性の幅を広げてくれるだろう。また、プレビュー時のアンシャープマスクやプリンタプルーフ表示も写真の仕上げ作業の品質向上に役立つことだろう。

特に覆い焼きやHDRがそれぞれハイライトとシャドーを分離して行えるようになったこと、例えば、覆い焼きのみではシャドー部にのみ適用されハイライト部の明るさには影響がでない。また焼き込みのみではハイライト部分にのみ適用されシャドー部の明るさには影響がない。

また美肌処理は、肌色部分を自動で検出し滑らかに表現する事で、肌の荒れや角質などのディテールを抑える事ができる。肌色以外の部分には影響がなく自然な仕上がり。最近ではカメラの高画素化で、肌のディテールも再現され過ぎる場合があり、ポートレートや肖像写真では必須になるだろう…



・エプソン販売株式会社：松岡 達也 氏 EPSON プリンターを使用したプリント技術セミナー

記念勉強会の最後は、エプソン販売株式会社による、プリント技術セミナー。今回の8周年展でも同社のプリンターを使用した作品が数多く展示されている。今回は最新のPX-5V IIの最新機能解説をはじめ、実際のプリンターを操作しながらのプリント技術セミナーを行なった。

特に前者2メーカーの協力も得て、DIGITABLEの8月夏合宿時にPENTAX645Z、K-3の実機をお借りし、その撮影データを会員及び横山氏がSILKYPIXで現像、松岡氏がEPSON PX-5VとPX-5V IIで比較プリントを作ってもらったという、まさに写真の入り口から、中間の処理、プリントという出口まで、三拍子そろった充実したセミナーとなった。

●
充実した勉強会の後は、同会館の別室に移っての、クロージングパーティ。22名の会員はもちろん、ゲスト講師陣、数多くの一般参加者も交えて懇談の輪が開いた。参加者全員の笑顔の中、長い記念勉強会の一日は終了した。

DIGITABLE 写真技術勉強会 (HOME) <http://www.digitable.info>

